

モアレ

学校
の
怪
談

成年向パロディ...

PARALLEL ACT

あらすじ

本編の展開を事前に知りたくない方は飛ばしてください。

さつきの家に泊りに来た桃子。何時も通りお化け出現。例によって佳耶子が桃子に憑依。霊眠には成功するが、その現場を礼一郎に見られてしまう。いや、佳耶子が礼一郎を見てしまう。

礼一郎を見てしまった佳耶子は礼一郎への想いを復活、桃子の心を乗っ取り始める。桃子と佳耶子の意識は交錯し、遂には佳耶子の意識が勝る。

桃子へと身体を返すため、佳耶子の取った行動とは!?

目次

あらすじ	i
第1章 再憶	1
1.1 再会	1
1.2 会食	2
1.3 混心	3
第2章 交身	5
2.1 嘆願	5
2.2 融心	7
第3章 後悔	13
3.1 別心	13
あとがき	15

第1章

再憶

1.1 再会

「やつきよ、永久とわに眠れ！ やつきよ、永久とわに眠れ!!」

ここは宮ノ下家の廊下。さつきが人形を握り締めながら叫んでいる。お化け日記によると、佳耶子は人形に「やつき」を霊眠させたとある。このまま何も無ければ無事にやつきを霊眠させられる筈だ。

この日、敬一郎はクラスの友達の所に泊りに行っている。代りと言っては何だが、桃子がさつきの家に泊りに来ている。なにせ隣の家にはパンツ魔がいるので、さつき一人では安心できないからだ。それは冗談だが、半分真実でもある。しかし、佳耶子さんの娘のさつきと、靈感体質の桃子が二人一緒にいて、お化けが現れない筈がない。この日も案の定「やつき」と言うお化けが出た。桃子に佳耶子が憑依し、さつきにアドバイスを与えたために、特に何事もなく霊眠させられそうである。

「さつき！ もう少しよ!!」

「わかってる。まかせて!!」

頼もしい会話。やつきの苦しみも増している。

「ただいまぁ」

「!？」

突然の来訪者。さつき振り向く。玄関に礼一郎。一瞬集中が削がれる。

「ぐがお～っ!!」

やつきの腕がさつきに伸びる。

「危ない！ さつき!!」

桃子がさつきを突き飛ばす。やつきの腕が桃子の身体を突き飛ばす。

「きゃぁあ～!!」

桃子の身体が宙を舞う。

「うわっ!？」

幸いな事に、桃子の身体は礼一郎の元に飛んで行く。礼一郎は状況を把握していなかったが、辛うじて桃子を受け止める事ができた。

「桃子ちゃん!! くっ!」

さつきは桃子から突き飛ばされて床に倒れていたが、すぐさま体勢を立て直す。

「やつきよ、永久とわに眠れ! やつきよ、永久とわに眠れっ!!」

「ぐぎゃお~っ!!.....」

やつきの身体が光に包まれ、さつきのもつ人形に吸い込まれていく。霊眠終了だ。

「ふう... 桃子ちゃん、大丈夫?」

やつきを霊眠させて一息付くと、さつきは突き飛ばされた桃子を心配する。

「.....」

「.....礼くん...」

そこには、なぜか礼一郎を見つめる桃子と、意味が分からず呆けている礼一郎がいた。

1.2 会食

「で、さつき。さっきのは何だったんだ?」

「や、やだ、パパア。何でもないわよお」

「そうよ、礼くんは何も気にしなくていいのよ」

「え?」

さつきと礼一郎が桃子の顔を見る。

「え? あら、やだ。私わたくし、何か言いました?」

「ん、うん。何も...」

“おかしい。今日の桃子ちゃんは何かおかしいわ”

お化けを霊眠させた後、さつき・桃子・礼一郎の3人で夕食を食べる。さつきはお化けの話題を必死にそらそうとする。ただ、桃子の様子がおかしいので、お化けの話題はそれやすいのだが、別の悩みが増えそう。そしてその悩みはさつきよりも桃子の方が深刻なようだ。

“どうしたのかしら? 私。さつきちゃんのお父様の事『礼くん』なんて言ったりして。それに、さつきからさつきちゃんのお父様の事見ると...”

と言って顔を上げると、丁度礼一郎と目が合う。

「!？」

思わず顔を伏せる。顔中が、耳まで熱い。

“ そんな、今までさつきちゃんのお父様を見ても、何とも思わなかったのに... どうして？ ”

「桃子ちゃん、と言ったっけ？ 醤油取ってくれるかな？」

「.....あ、はい!? どうぞ」

桃子は礼一郎の声に気づくのが遅れたが、礼一郎に醤油を渡す。

「あれ？」

「どうしたの？ パパ」

「今の桃子ちゃんの渡し方、ママの渡し方に似てたような...」

「え?!」

その場が固まり、さつきも桃子の方を見る。

「そんな、お醤油の渡し方なんてみんな一緒よ」

「そ、それもそうだな。ははは」

“ 礼くん鋭くなったわね。前は全然鈍かったのに... 前!? 前っていつ!? さつきちゃんのお父様とお会いしたのは何回もないのに!? ”

「どうしたの？ 桃子ちゃん、顔色悪いよ」

「え!? ああ、何でもありませんわ」

「そう？ なら良いけど...」

口ではそう言ったが、桃子は、内心悩んでいた。何かが変っている。自分の何かが。

1.3 混心

「それじゃあ、電気消すね、桃子ちゃん」

「ええ」

桃子は敬一郎のベッドを代わりに使う。暗くなった中、敬一郎のベッドの中でじっと天井を見つめる。

“ 私、本当にどうしたのかしら ”

そう思っている間にも、礼一郎の顔が浮かんでくる。

「!？」

桃子は思わず布団を被る。顔が火照る。心臓の鼓動が何もしなくても聞こえる。

“ そんな、さつきちゃんのお父様に赤くなるなんて... だって久しぶりに会ったし..... 久しぶりじゃないですわ!! 礼くん最後に会ったのは... ! 礼くんじゃない!! 何!? 私、どうなってしまいましたの!? ”

桃子は、何が何だか分からなくなっていた。自分が自分でなくなっていく。知らない記憶が自分の中に生まれてくる。知らない意識が生まれてくる、いや、自分に混ざってきて

いる。

家族で遊園地に行った時の記憶、敬一郎の誕生の記憶、さつきの誕生の記憶、礼一郎とのデート、様々な記憶が頭を廻る。そして、礼一郎とのベッドでの思い出が頭を廻った時、
“ **きゃああ～っ!!** ”

辛うじて声には出さなかったが、顔の火照りと心臓の鼓動が頂点に達する。

わたくし わたくし わたくし
“ 私、私、私...”

もはや考えにもならない。頭の中には礼一郎とのベッドでの出来事ばかりが浮かんでくる。

“ 礼くん、礼くん、礼くん...”

桃子は、ギュッとパジャマの襟元を握る。もう片方の手を下腹部に持ってくる。

「ふっ！」

背筋に衝撃が走り、思わず無声音の悲鳴を上げてしまう。

「はぁ... はぁ... はぁ.....」

“ 駄目よ、下にはさつきがいるんだから...”

桃子は、ゆっくりと起き上がる。下着とパジャマがぐっしょりと濡れている。ドアが目
に止る。そして、ゆっくりと、音を立てないように梯子を降り、ふらつきながら部屋を出
て行った。

第2章

交身

2.1 嘆願

ここは、礼一郎の部屋。礼一郎は、生前の佳耶子の写真をじっと見つめている。

「佳耶子。今日、さつきの友達が泊りに来たよ。何故だか分からないけど、彼女を見てみると君を思い出したんだ。可笑しいだろ。顔とか、全然似てないのにな」

ガタン！

誰かが、ドアに倒れかかったような音がする。続いて、か細いノックの音がする。

「誰だ？ さつきか？」

深夜、さつきらは寝た筈。それにノックの音がおかしい。

「私よ。佳耶... 桃子です」

「桃子ちゃん？ 何だい？ 入って良いよ」

「失礼します」

桃子が、静かに、うつ向きながら礼一郎の部屋に入ってくる。

「どうしたんだい？ こんな夜中に」

「相談したいことがあるんです」

「相談？」

“桃子ちゃんぐらいの年頃だと色々悩みもあるんだろう。それに、自分の父親だとかえって話しづらいものだろうし。今日様子がおかしかったのもそのせいかな？”

「あの、さつきさんのお父様は、お化けとか信じますか？」

「へ？」

礼一郎は、予想外の質問に戸惑う。確かにこの年頃の女の子は占いとか、こっくりさんとかが好きだと言うことは聞いているが、あまりにも唐突すぎた。

「もし私が... 佳耶子だと言ったら信じますか？」

「何?!」

礼一郎は、予想外の限界を越えた質問に混乱する。幾ら予想外と言っても常識の範囲と
いうものがある。その範囲さえも越えていた。

「やっぱり、こんな事言っても信じてもらえないですね...」

「.....そりゃあ、ねえ」

「^{わたくし}私も、良く分からないんです。今まで、佳耶子さんが乗り移ったことは何度かあったみ
たいなんです。でも、今度のは違うのよ」

「違うってどんな風に？」

「簡単に言うと、混ざっちゃったみたいなの。^{わたし}私と、桃子ちゃんが」

「え、ええと、混ざったってどう言うこと？」

「今、^{わたし}私の人格と桃子ちゃん的人格が、変るがわるに出てるのよ。それだけじゃなく、互
いの人格と記憶が一部重なりあってるの」

そのようなことを言われても、礼一郎は苦笑いするしかない。信じられないのと、理解
できないのと。

「やっぱり、理解できないみたいね。じゃあ、礼くんのお尻の右にほくろがあるでしょ。
それも3つ並んで」

「う...」

「中学2年の時、1年の新島さんに告白してふられたよね」

「う..... 何でそんなこと知って...」

「礼くんがへそくりを隠すときは、ハードカバーの本を刳り貫いて中に隠す」

「まさか時々減ってたのって...」

「小学校1年の時、先生のことを『お母さん』と呼んでクラスの皆にからかわれる」

「あの時一番からかったのは佳那子じゃないかっ!!」

「分かってくれた？♡」

「.....」

立て続けに自分と佳耶子しか知らない事を並べられては信じるしかない。

「本当に、本当に佳耶子なのか？」

「そうよ、礼くん♡」

「それで、どうすれば桃子ちゃんは元に戻るんだ？」

「あら、礼くんは久しぶりに会えたのに、^{わたし}私に消えてもらいたいのお？」

「そりゃ、俺だってお前に会えたのは嬉しいさ。でも、このままってわけにもいかないし、
どうしても違和感があるんだ」

「そうねえ、このままじゃマズイって一番分かってるの私だし。でも...」

佳耶子の顔をした桃子が礼一郎に擦り寄ってくる。

「でも、消えるまでの間、こうしていさせて.....」

そう言って礼一郎の胸にすがり付く。

「お、おい、ちょっと...」

「いいでしょ... 礼くん。私が死んでから、ずっと、ずっと会えなかったんだから...」

「佳耶子.....」

礼一郎も抱き返す。

「それにね、こんな事になったのは、私が桃子ちゃんに憑いている時に礼くんに会ったからだと思うの。だから、私が礼くんへの想いを満たせれば、また元通りになると思うの」

「本当にそれで、桃子ちゃんは元に戻るの？」

「多分...」

「多分って... んく...」

そこまで言いかけた処で、礼一郎の唇が塞がれた...

2.2 融心

「ん...んく...」

佳耶子は、舌まで入れてきた。見た目は桃子の身体の13歳でも、中身は礼一郎とやり尽くした佳耶子である。礼一郎はその舌使いに懐かしさも覚える。しかし、目を開いてみると、そこにあるのは桃子の顔。礼一郎の脳裏にある不安がよぎる。

「待って。さっき、桃子ちゃんと混ざってるって言ったよね。じゃあ、今桃子ちゃんの意識も少しはあるって事？」

「大丈夫、今は完全に私わたしよ...」

「じゃあ、今やってる事を桃子ちゃんは...」

「全く覚えていないわ。だから、安心して...」

「んく...」

佳耶子は、前よりも強烈なキスをしてきて、礼一郎を押し倒す。生前も佳耶子の方がリード気味だったが、何年もの想いがさらに積極的にさせる。また、それは礼一郎も同じだった。それに死んでいた佳耶子と違い、礼一郎は生きて色々な想いを溜めてきた。佳耶子とのキスを続け、気分が乗ってくると佳耶子に負けじと積極的になってくる。

今までとは逆に佳耶子を押し倒し、唇から首元に、パジャマのボタンを開けながら胸元に唇を這わせていく。パジャマを開くと、桃子の、まだ装飾がさほど施されていないブラが現れる。

「もうブラしてるんだ。最近の娘は成長が早いなあ」

「だって、桃子ちゃんは13歳ですもの。しててもおかしくないわ」

「ふうん、お前はいつからしだしたんだ？」

「内緒♡」

手を後ろに回し、ブラを外す。もう何百回も外しているので慣れている。そして桃子の膨らみかけた胸を嘗め回す。それと同時に、自分もゆっくりと服を脱いでいく。

「はっ！ ああ...」

「桃子ちゃんの身体でも感じる場所は同じなんだ...」

「だって... 今は私なのよ...」

「そうだったね...」

「あん...」

そう言って桃子の可愛い乳首に吸い付く。

「はあ... あ...」

「やっぱり小さいね...」

「そんな、桃子ちゃんに悪いわ...」

「さつきも、もうそろそろブラが必要なのかな？」

「あの娘はまだよ...」

「それは、君の経験かい？」

「もう、意地悪... ひっ!!」

右の乳首に吸い付きながら、左を指で摘まんで弄ぶ。

「君の心で開発しておけば、桃子ちゃんも敏感になるのかな？」

「なるかも知れないわね...」

「じゃあ、念入りにやっておけば桃子ちゃんに感謝されるかな？」

「どうかしら... あん...」

「お前は、この辺りが弱かったよな」

「あ、そこ！」

と言いつつ、ヘソの辺りをまさぐる。

さらに下に向かい、パジャマのズボンを下ろす。桃子の木綿のパンツが露になる。足を開かせ、内股に下を這わせる。まだ、第2次性徴が始まったばかりの、細い足が震える。

「桃子ちゃんの足ってすべすべ何だね」

「そりゃ私だって、13の頃は...あんっ！」

話を遮るように、パンツごしに鼻でクリトリスをさする。そして、ゆっくりとパンツを下ろし始める。まだ無毛の局部が露になる。

「まだ生えてないんだね」

「や...」

「これは、お前のじゃなくて桃子ちゃんのだろ」

「でも、恥ずかしい...」

「とても綺麗だよ...」

クリトリスを舌先で直接嘗め回す。

「ひゃ、あ...」

桃子の綴じた肉をゆっくりと開く。小さく綴じた穴がキラキラと光っている。

「濡れてるね」

「だって、あなたを感じてるから...」

人差し指で、穴の周りをそ~となぞる。

「ひ、イツ！」

かまわずなぞり続ける。

「イ、痛っ!! 止めて...」

「そんなに痛い？」

礼一郎は桃子の局部をなぞるのを止め、桃子の、佳耶子の横に寝る。

「これ以上は無理だよ」

「ハア、ハア、いいえ、続けて...」

「えっ!? でも」

「私なら平気だから...」

「また、あの時のような痛いおもいをするんだぞ」

「礼くんとなら、何度でも平気...」

「それに、この身体は君のじゃなくて桃子ちゃんのだぞ」

「大丈夫、桃子ちゃんも、痛いおもいを代わってくれたって、きっと喜んでくれるわ」

「でも、桃子ちゃんは初めてなんだから、それを僕が破っても...」

「お願い...! このままじゃ、桃子ちゃんのはは一生出てこれないわ」

「.....分かった」

礼一郎は桃子の身体の処女を奪う決心を固める。少女の処女を、本人の意識がないまま破る罪悪感はあるが、男として処女を破れるという誘惑には勝てないものがある。礼一郎は、まず指を濡らすと、桃子の膣口にそっと触れる。

「ふっ!...」

佳耶子は痛みを感じるが、それを声に出しては礼一郎がその行為を止めてしまう。礼一郎の指が、ゆっくりと桃子の中に入ってくる。案外入ってしまうと痛みは感じない。そして、ゆっくりと出し入れする。

「大丈夫？」

「ん、平気...」

礼一郎は指を引き抜くと、愛液と唾液を自分の物に塗り付ける。そして、ゆっくりと自分の物を桃子の膣口にあてがう。

「行くよ」

「いいわ。お願い...」

ぐっと力を入れる。亀頭が暖かくて柔らかい粘膜に包まれる。礼一郎は添えていた手を

桃子の肩に回す。

「ヒィ!! ヒッ! ぐう...」

「痛いのか?」

「だ、大丈夫... 続... けて.....」

礼一郎は肩に回した手に力を込める。強い抵抗に抗い、一気に身体を進める。

「あッ!!...」

一瞬の事だったので、破瓜の悲鳴も一瞬で掻き消える。それから、段々と痛みが増してくる。礼一郎にも、桃子の小さな膣の締め付けが襲ってくる。小さいだけでなく、緊張と痛みから収縮が強くなっている。

「佳耶子、大丈夫か?」

「だ、大丈夫よ... でも、礼くんも苦しそう...」

「だって、君の締め付けが凄くて...もう少し、力を緩めて...」

「そ、そんな事言ったって... 無理よ...」

桃子の顔は苦痛に歪んだまま。礼一郎は佳耶子の痛みを和らげるために、動かず、ずっと抱きしめている。それに、動こうと思ってもきつくて動くことができない。

「礼くんも、大丈夫?」

「気持ち良くないんじゃない?」

「僕なら大丈夫だよ。それより、君の方が心配だよ」

「私なら大丈夫よ。あなたを、感じたいの...」

「そう、なら、少しずつ動くよ...」

礼一郎は自分ゆっくりと腰を上げ、引き抜いて行く。その窮屈さと、愛液が枯れたせいで肉が引っ張られる。何度か出し入れし、身体全体を持ち上げて、自分の股間を覗き込む。桃子が処女だった証拠の血液がまとわりついている。

「佳耶子、見てごらん。君が見るのは2度目かな?」

佳耶子も顔を上げて覗き込む。自分の、桃子の膣に、血で鈍くてかる物が出入りしているのが見える。

「2度目の初めてね...」

「どう? 初めてを2回やった気分は?」

「やっぱり良いもんじゃないわ。一度で十分よ」

「桃子ちゃんは初めてがなくなったけどね」

「大丈夫、初めてが痛くないだけよ」

「そういうもの?」「そういうものよ。礼くん、大分慣れてきたから、もう少し動いていいわよ」

「いいの? それじゃ...」

と、奥まで進める。亀頭に、桃子の固い子宮口が当たる。

「痛...」

「ごめん。まだ痛い？」

「痛いけど、動いて... 中途半端じゃ、終わらせたくないの」

「分かったよ...」

礼一郎は、今までよりもペースを早めて動きだす。子宮口の感覚が、奥まで突いている高揚感を醸し出す。子宮口に当たる度に佳耶子は短い悲鳴を上げる。動く度に、枯れた愛液が再び滲み出してくる。それに、桃子の小さな膣から生まれる締め付けは、大人の佳耶子では得られない快感をもたらしてくれる。

「ああ、佳耶子... いくよ」

「いいわ、来て...」

「うっ、うっ、うっ、う?!」

礼一郎が、引き抜こうとしたその時、佳耶子が腰に足を絡めてきた。

「佳耶子、これじゃ...」

「お願い... 中に出して...」

「中って、この身体は...」

「お願い..... これが、最後の...」

と、絡めた足に力を込める。腰が完全に密着し、子宮口が亀頭を刺激する。その瞬間...

「うぁ!!」

独身で溜った精液が、勢いよく桃子の子宮を目掛けて吐き出されていく。

「ああ...」

佳耶子も、身体の奥に礼一郎の体温を感じ、吐息が漏れる...

第3章

後悔

3.1 別心

差し込む朝日。雀の泣き声。久々の清々しい朝。礼一郎を腕枕に、桃子は安らかな寝息を立てている。

“良く寝てる...”

まるで、昨晚の激しい情事が嘘のようだ。

「ん... んん...」

「おはよう。起きたかい？」

桃子は、ゆっくりと瞼を開ける。焦点が合ってくると、目の前に成人男性の顔が現れる。頭がはっきりしていくにしたがって、それが礼一郎の顔だと認識できてくる。

「あ、さつきさんのお父様、おはようござ...」

段々と頭がはっきりしてくる。自分はさつきの2段ベッドの2階に寝ていた筈なのに、どうして彼女の父親の顔が目の前にあるのだろう。それに、肌の感触が普段と違う。下着とパジャマの滑らかな感覚ではなく、少しざらざらとしたシートと、肌と肌が直接触れ合う感覚.....

「きゃああ～っ!!」

桃子は悲鳴を上げると、シートを掴んで後ずさる。

「ひっ!？」

桃子は、毛布を剥され露になった、初めて見る男性器に息を失う。徐々に状況を認識してくると、自分の股間に疼痛を感じてくる。

朝目覚めると、男女が全裸で同じベッドにいる状況。股間に痛み、さらにシートに血痕を見つけると、否定する要素が完全に無くなり、顔が蒼白、唇が震えてくる。溢れた涙が両頬を伝う。

「桃子ちゃん...」

「どうして... わたくし わたくし 私、私...」

「桃子ちゃん、これは...」

「ひいつ！」

落ち着かせようと肩に触れるが、奮える目で見つめられた礼一郎は、これ以上声をかけることができなかった。

あとがき

あ～やっと完成しました。コミケット 64 では完成させる事ができずに、今回ようやく完成です。でもなんかしり切れとんぼな気はするし、自分の文章力の無さを痛感した本ですが。やっぱり絶対的な読書量が足りないですね。もっと精進せねば。

ひとまず『学校の怪談』本を 1 冊ちゃんと出す事ができましたが、ネタが浮かべばもっと出す事になると思います。佳耶子さんの精神じゃなくて、ちゃんと桃子とか、さつきとか、その他脇役とか。

さて、印刷環境ですが、コミケット 64 と同じく Linux 上の L^AT_EX 2_ε で書き、dvi_{pdfm} で PDF にした後、Windows XP から、キヤノンのプリンタドライバの機能で製本印刷してます。こうして印刷した方が綺麗ですからね。

今はモリサワフォントを使っていますが、ヒラギノフォントでも良いかなあ？ と思い始めてます。otf パッケージ使うと、使える文字が増えるし。その場合、数万円の OpenType フォントを買うか、いっそ Mac を買ってしまおうかと悩んでいます。Mac OS X は UNIX だし(笑)ただ、L^AT_EX 2_ε のインストールは楽なようですが、まともに動く Emacs が無いようですね。テキストベースか、インライン入力ができない X 版しか無いようで。それじゃ辛いなあ。Windows XP で、Meadow 入れて、FEP は ATOK で、と言うのが案外 L^AT_EX 2_ε を使うのに最強かもしれません。細かなツールは cygwin があるし。なんか挫折したみたいで嫌ですが(笑)

それはともかく、また次の本でお会いしましょう。

誌名	モアレ
発行	PARALLEL ACT
発行者	村上 智一 (TomOne)
発効日	2003 年 12 月 30 日 (第 2 版)
URI	http://kikyousakura.ne.jp/~tomone/
E-Mail	tomone@kikyousakura.ne.jp

